

．学校の概要（平成15年4月現在）

徳島市 南部中学校

	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	6	6	7	1	20	(含む加配)
生徒数	204	232	248	6	690	37

本校は、昭和28年、多家良中学校、勝占中学校の両校を合併し南部中学校として創立された。論田、大松、方上、渋野、宮井、飯谷の6つの小学校から進学してくる。校区は、徳島市の面積の約1/3と非常に広く、山あり、海あり、川ありの豊かな自然に恵まれている。

現在、生徒数は690名、1年6クラス、2年6クラス、3年7クラス、障害児学級1クラスの20クラスである。生徒は明るく素直で、純粋な子どもらしい面を持っているが、その反面、いろいろな面でまわりから影響されやすい。6つの小学校から入学してくることもあり、あまりにも周りのことを気にするところがある。授業中や生活のいろいろな場面で、自分の考えをしっかりとってみんなの前で堂々と主張する力にも欠けているように思われる。だから、40人もの大人数になると、いろいろな疑問を持っていても質問することができなかつたり、せっかくなすばらしい意見を持っていてもみんなの前で発表するのを躊躇したりするケースが多く、活発な授業の展開へと結びついていない。そんな状態では、確かな学力も身につくのではないかと考えている。

さて、今年度は昨年度の研究成果、課題をふまえながら実践研究を進めている。まだまだ、課題を絞り切れていないのが現状である。しかし、本校生徒の実態をふまえて、昨年に引き続き研究主題を次のように設定し実践研究に取り組んできた。

．実践研究の概要

1．主題（テーマ）

確かな学力の定着をはかるための、生徒一人一人の実態に応じた指導のあり方

## 2. 内容与方法

### (1) 重点的指導の実施学年・教科

教科は、1年生は英語、2年生は数学、3年生は選択学習である。

1年生の英語は、1つの学級を2つのグループに分けて、二人の教師が指導する少人数指導、2年生の数学では1つの学級で、二人の教師が指導するチームティーチング指導を取り入れ実践研究を進めている。また3年生では、4時間の選択授業の時間をとり、コースも8～9コース設置し、子どもの興味・関心や自分の進路と照らし合わせながら、生徒たちにコースを選択させ実施している。

### (2) 年次計画

平成  
14  
年  
度

テーマ 確かな学力の定着をはかるための、生徒一人一人の実態に応じた指導のあり方

仮説 少人数指導、チームティーチング指導をすることによって確かな学力の定着をはかることができる。

研究内容・方法

1つのクラスを2つに分けて指導をする少人数指導1つのクラスを2人の教師で指導を行うチームティーチングについて指導法の工夫や教材の研究を行う。

平成  
15  
年  
度

テーマ 確かな学力の定着をはかるための、生徒一人一人の実態に応じた指導のあり方

仮説 少人数指導、チームティーチング指導をすることによって確かな学力の定着をはかることができる。

読書指導をすることによって読解力・表現力をつけることができる。

研究内容・方法

少人数指導・チームティーチング指導について、指導法の工夫や教材の研究を行う。

週1時間、読書の時間をもうけ、意識的に読書をさせることにより、すべての学習の基礎である読解力・表現力を身につけさせる。

学力向上に効果的な教材開発を行う。

評価のあり方について研究をすすめる。

平成  
16  
年度

テーマ 確かな学力の定着をはかるための、生徒一人一人の実態に応じた 指導のあり方

仮説 少人数指導、チームティーチング指導をすることによって確かな学力の定着をはかることができる。  
読書の時間を効果的に実施することによって読む力、書く力、表現する力をつけることができる。

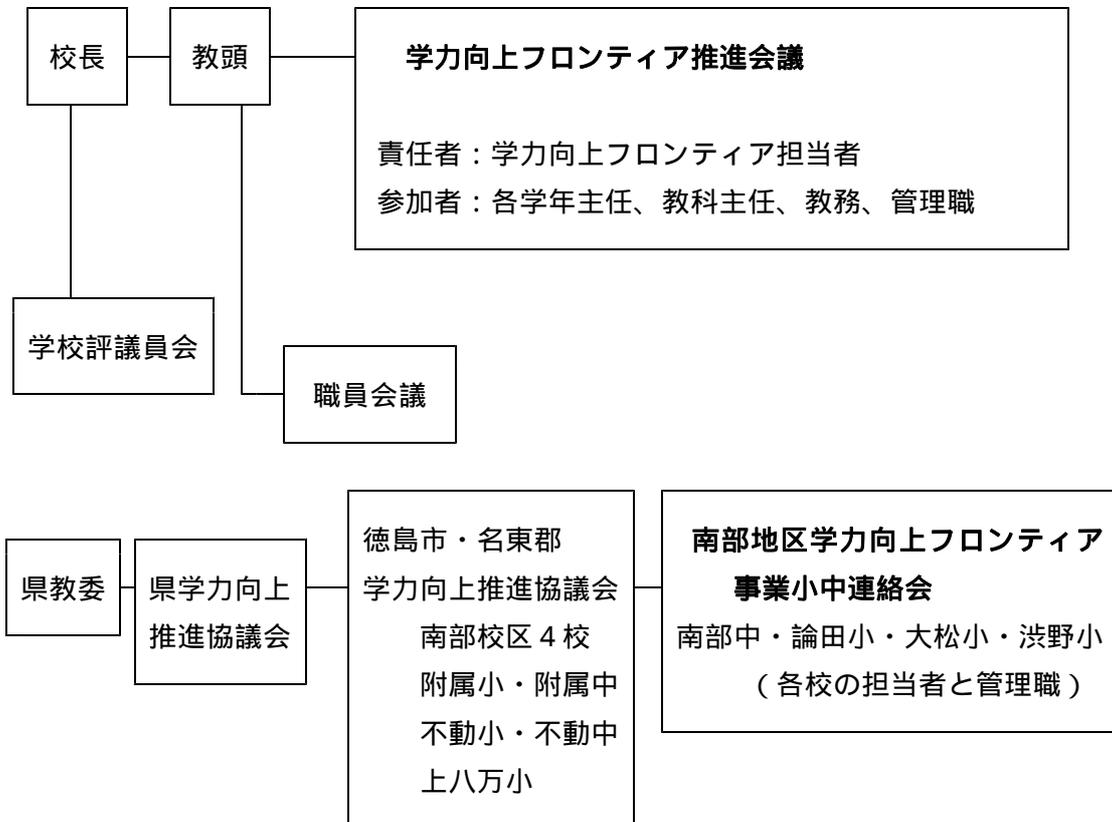
研究内容・方法

1つのクラスを2つに分けて指導をする少人数指導、1つのクラスを2人の教師で指導を行うチームティーチングについて指導法の工夫や教材の研究を行う。  
三年間の研究のまとめを行う。

### (3)研究体制

・フロンティア事業に関する実践研究組織図

< 校内の研究組織・体制 >



## ・成果と今後の課題

本年度、1年生は英語で少人数指導、2年生は数学でTT指導、3年生は選択学習で個々の生徒の関心・意欲を大切にしたい選択学習のあり方の研究を進めてきた。また、効果的な評価法の研究、そして、読解力、表現力を身につけることを目標に読書の時間の指導についても研究を進めてきた。

研究の一端を紹介することにする。

### (1) 英語の少人数授業について

#### 授業形態

ひとつの学級を無作為に2つに分けて(17名)1人の教師が指導にあたる。週3回の全授業で行っている。

#### 授業記録

少人数指導のメリットは、ひとりひとりに目が届きやすいことである。そのため生徒に言語活動をさせる場合にも遅れがちな生徒や、積極的に取り組めていない生徒を支援しやすい。少人数であるため従来よりも時間が短縮でき、結果的に生徒の活動を多く取り入れることができる。たとえば、

ア 新出文型・語句もひとりひとり発言する機会がある。

イ 本文の暗唱も全員チェックできる。

ウ 短時間で全員がスキットの発表もできる。

エ 家庭学習にまわしがちになるライティングの時間がとれる。

などである。授業ごとに行われる活動にも一人一人の生徒が参加する機会が確保されている。言語活動を充実できることは教科の目標を達成するために非常に有効である。

### ～授業例 Unit 4 日本大好き 3 あなたの好きな教科は?～

生徒の活動	
1. 新しい表現の練習 インタビュー活動	
2. 新しい語句の練習 発音/意味 (全体練習のあと、 ひとり一語ずつ発音)	
3. 本文の内容理解	
4. 本文読みの練習 コーラス/ペア	
5. まとめ ノートに本文を写す ワークブック	

生徒はインタビュー活動で、友達と協力しながら積極的に活動していた。英語の読み方が分からない生徒に教えあう場面も多く見られた。制限時間内で指定された数をこなしたものが多数であった。最後のペアでの暗唱もすばやくこなした。日本語訳を参考にしなくても暗唱できるペアも半数ほどいた。毎時間、何かの活動を取り入れて行っているが、ペアワークを行う場合が多い。この際、遅れがちになる生徒とペアを組む生徒のなかには負担を感じるものもいる。これらの生徒へのサポートのしかたに多様性を持たせることが現在の課題でもある。

本校では各学級とも学期に2回程度ALTとのチームティーチングを行っている。ALTとのチームティーチングは生徒にとっては英語を使う絶好の機会である。生徒は集中して教師の話す英語を聞いており、わからないところがあっても絵やジェスチャーなどから理解しようと努めている。またALTからの質問などにもはずかしくなく堂々と答えたり話したりしている。ふだんの日本人教師との授業時よりも声も大きく前向きに授業に臨んでいる。従来のクラスと比べるとALTと直接会話する機会がはるかに多く、積極的な態度は授業に参加している満足感・外国人の教師と接している満足感からきているようにも思われる。

#### 少人数指導における成果と課題

少人数での授業について生徒の意識をアンケート形式で調査した。(4クラス68名、9月上旬)その結果、73%の生徒が少人数での授業は良いと答えている。

また、その理由として多かったものは、順に

- ・リラックスして授業を受けられる
- ・集中して授業を受けられる
- ・先生に質問しやすい
- ・説明が分かりやすい
- ・発言しやすい
- ・友達と協力して活動できる (複数回答可)

であった。その他として、「先生が一人一人を見てくれていると思うから。」「発言があたりやすい」「楽しい」という記述があった。一方、「いいえ」「どちらともいえない」と答えた生徒はその理由として、「みんなと一緒にのほうが活気がある」「多くても少なくともかわらない」「さわぐ子が余計にふざける」などと答えた。

担当している3名の教員とALTに、少人数での授業について自由記述の形式で答えてもらった。

- ・生徒の活動の機会を増やすことができるのでよい。  
(40人が1度ずつ発表などをするとところを2度あるいは時間を2倍にできる。)
- ・生徒の活動の機会が増え、目も届きやすいのでサポートしやすい。  
ペアワークやグループワークを多く取り入れることで、生徒同士の助け合いができ、教師は遅れがちな生徒についてサポートすることができる。
- ・生徒の学力にばらつきがある。遅れがちな生徒への効果的な指導をどうすればよい

のかが今後の課題だと思う。

- ・普通サイズのクラスでは言語活動をさせても生徒の動きをすべて把握することは不可能であったが、それが少人数ではある程度できる。インタビュー活動中にも「よく言えた」「発音がうまい」などその場その場で一人でも多くの生徒に声をかけられるのがありがたい。
- ・ Students seem to put more effort in the classroom, as well as being more focused on what is being taught. They seem less afraid of English than they are in bigger classes, and appear to be more motivated to learn.
- ・ Students tend to have better pronunciation on the whole than the ones in bigger classes do. など。

#### 考察

生徒は概ね、少人数指導に満足しているようである。リラックスして授業に臨めるため教師に対しても生徒同士でも発言しやすくなった。「集中して授業を受けられる」と答えたのは、落ち着いて説明が聞け、疑問に思った点をすぐに質問できるからだと考えられる。生徒はのびのびと授業に取り組んでおり、活動にも積極的である。授業するのも楽しい。一人一人の生徒に目が届きやすいので遅れがちな生徒をサポートしやすい。さらには理解の早い生徒に対し、ペアワークで友達をサポートすることを評価するだけでなく、さらに課題を用意するなど細かい支援の方法をとる必要があると思われる。

授業では積極的に活動し内容も理解しているが、定期テストやインタビューテストの結果などをみると十分に定着しているとは言い難い面もある。「聞く」「話す」活動では、音声で言おうとすることを理解し伝えられればよいが、定期テストなどでは正しく書けることが求められる。そのためには、家庭学習をふくめた学習指導や各領域のバランスよい授業展開についてさらに研究したい。

学力向上のためには、生徒のモチベーションを高めることが不可欠であると考えられる。そのためには生徒が「楽しい」「使えた」「わかった」など満足感を得ることが大切である。現在、少人数指導では生徒がいきいきと学習に取り組んでいる。今後も生徒がさらに達成感を感じられ、学力向上へとつながるように努力を重ねていきたい。

## (2) 2年生数学科におけるチーム・ティーチング

### 授業形態

一つの学級(38, 39名)に二人の教師が指導にあたる。週3時間の全授業で行っている。

### 授業記録

T.T は生徒のよさや可能性に対応したり、生徒の自己活動を支援するために非常に効果的だと考える。日常授業において、多く用いられている一斉授業では同一課題を使って一定の速度で一斉に解き方を指導する方式である。しかし、生徒の能力、適性

に応じた指導すなわち個人差への対応という面からは、この指導法だけでは十分とはいえない。そこで、全時間 T.T で行う授業をできるだけ効果を上げるために、この一斉授業を削減し、生徒一人ひとりが問題解決する課題の与え方を工夫するよう努めた。

数学の解法、証明の仕方は一つではない。柔軟なものの方や考え方を伸ばすために、いくつかの解き方を発見できるような課題を与え、各自がどんどん書き込んでいけるような自作プリントを利用した。



教師は役割分担を話し合っておき、**解法を見つけた生徒に発表の機会を与える** T1・全体指導と机間巡視しながら解法の支援・把握をする。T2・机間巡視をしながら遅れがちな生徒へ助言や解法のパターンを見出す。T2 は生徒の解法パターンを T1 に伝えると T1 はその後の一斉授業に生かすことができる。

数学を苦手としている生徒は、基本的な解き方で確実に解けることを大切にしたい。また、どんどん解法を発見していくため、授業時間を誰一人退屈することなく一杯打ち込んでいくことができると実感した。解法を発見すると生徒は自信に満ちた表情になりまた次の解法を発見しようとする。また、解けているにもかかわらず、消極的な生徒を、T2 が発見し T1 に伝えるとその生徒に前で発表する機会を与えることができる。遅れがちな生徒への対応はもちろん、数学の多様な見方、考え方について、二人の教師が把握できるメリットがある。個々を理解し、生徒の良さを発見したり、支援を与えられることにより、学力の向上にもつながっていくと考えられる。

### 生徒の発見した解法を支援する

### ～ 具体的な場面の一例 ～

単 元 図形と合同

単元の目標 円周角の定理を発見し、それが二等辺三角形の性質によって説明できることを理解する。

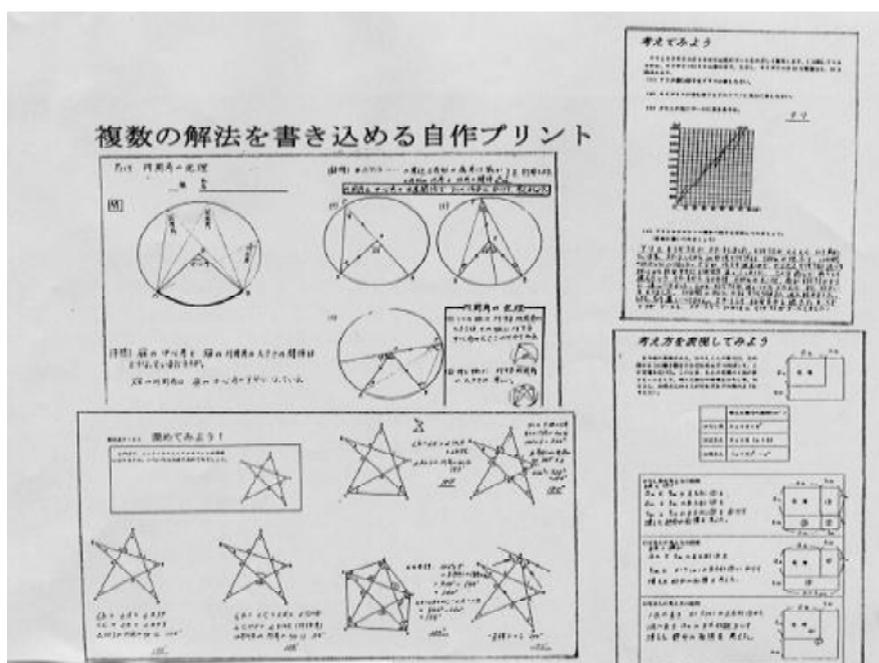
指導計画（9 時間）

二等辺三角形	4 時間
直角三角形の合同	2 時間
円周角の定理	2 時間（本時はその第一時）
問題	1 時間

展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援	
	T 1	T 2
<p>1. 円周角の定義について知り、同じ弧に対する円周角がいくつも存在することを知る。</p> <p>2. 同じ弧に対する円周角と中心角の関係について予想する。</p> <p>3. 円周角と中心角の位置関係により、その状況を 3 つに分けてしるし、証明する。</p> <p>4. 円周角と中心角の関係について整理し、円周角の定理をまとめる。</p>	<p>・ 同じ弧に対する円周角をたくさんかかせる。</p> <p>・ 円周上の点により、円周角が変わるのではないかと疑問をもつ生徒の意見を大切にし、証明が必要なことを告げる。</p> <p>・ それぞれの位置関係において、自分の考えた証明方法を生徒に考えさせ、発表させる。</p> <p>・ 予想したことが証明を通して論理的に確かめられたことを確認する。</p>	<p>・ 考えが進まない生徒に具体的な円周上の点を指示する。</p> <p>・ どんな位置関係について証明できているか生徒を個々に見て、そのパターンを T1 に伝える。</p> <p>・ 考えがまとまらない生徒を支援する。</p>

複数の解法を書き込める自作プリント



## T.Tにおける成果と課題

「T.T をすることにより良い点を述べてください。」というテーマで生徒の意識をアンケート形式で調査した。

- ・分からないところがよく分かるようになった。
- ・2人の先生がまわってきてくれると聞きやすい。
- ・質問しやすい。
- ・教えに来てくれる
- ・やる気がおこる。
- ・緊張感が生まれる。
- ・いくつも解き方が発見できたときうれしい。
- ・数学は得意なのでいくつも解き方を発見するのが好きだ。

T.T で授業を行うことにより、基礎基本の重視と個性を伸ばす教育の実現が可能になると考えられる。この指導を生徒個々の評価に生かすことは困難ともいえる。しかし、教師2人で取り組むことによってできるゆとりを、指導と評価が一体化した有効的な方法に使いければ理想であるとする。生徒の潜在能力を最大限引き出すことのできる授業展開・評価方法が今後の課題である。

### (3) 観点別評価のあり方について

#### 取り組みの経緯

##### a 平成14年度

教科部会において各教科観点別評価基準表を作成した。また、各観点ごとに観点別評価の数から、評定に換算した。その結果、どうしても観点別評価のBの上下の幅がかなりあり、不公平感が感じられると、という問題が浮かび上がった。

##### b 平成15年度

ア 前年度の反省から、次のような流れで各部会をもった。

4月の各教科部会では、新学習指導要領の目標や内容の把握について共通理解をし、観点別学習状況の校内評価基準案の工夫と改善と観点別評価ABCの数での換算方法の工夫と改善について話し合った。

5月の初旬には、特別活動委員会を開き、生徒会活動・学校行事・学級活動の観点確認をし、総合的学習委員会では、観点と評価について検討をした。また、中旬には教育課程委員会(管理職・教務・学年主任・教科主任)を開き、各教科から出された校内評価基準案の検討と調整、通知表及びコンピュータによる情報通信ネットワークなどの情報手段の積極的な活用方法について議論を交わした。その後、企画会・職員会をへて、校内評価基準の検討と共通理解を図った。同時に今年度の新たな試みであるネットワークを活用した校内研修を、講師を招いて6月下旬に行うことになった。

#### 観点別評価と評定の改善点

以上のように各種の部会で校内研修を重ねた結果、概要として次のように決められた。

各学期の観点別評価について

- ・素点を10段階に換算し、その達成度によりABCに換算する。

各観点から学年末評定に換算する方法

- ・各学期の素点を合計し、その達成度により、学年末の観点と5段階評定をする。また、共通理解事項として、教科の特性により観点別評価の一部に重み付けをすることも可とし、それは各教科部会の決定にまかせることとした。その結果について、年度当初に教科担任から生徒に評価の観点について十分に周知を図った。また、保護に対していつでも説明責任が果たせるように、資料等を準備しておくことを職員会議において確認した。

今後の課題

a 評価基準について

今年度の実践をもとに、校内基準内容の改訂とより良い評価方法の確立を目指した研修を重ねる必要がある。

b パソコンによる情報通信ネットワークについて

評価に労力を必要とする分、事務の省力化が要求される。私達はそのためにパソコンを最大限利用したいと考えている。しかし、一方では個人情報の安全対策・著作権問題・情報モラル等への対応策を考える必要がある。情報・研修各担当者を中心として、更に個々の教師の資質を高めるための研修が必要であると考えている。

(4) 読書の時間について

本校では、基礎基本の定着に力を入れた教育を実施している。その一環として、今年度は全学年1時間(45分)の「読書の時間」を週1回5時間目に設けている。読書の時間に読む本は各自で用意することになっている。生徒・教員のアンケート結果をふまえ、その影響や成果について考えてみたい。

生徒のアンケート結果によると、読書の時間があったという生徒は6割を占めている。中でも、読書を好きになったという意見が最も多い。具体的には、「前は『本』を買うことがなかったのに買うようになった。」「本を買うときにマンガではなく、小説などを買うようになった。」「よく本を読むようになった。」「家でも本を読むようになった。」「図書室を利用するようになった。」「図書館に行ってみたいと思うようになった。」など「読書」に興味を持ち始めたというものが目立つ。教師のアンケート結果からも「休み時間に本を読んでいる生徒が増えた。/例年に比べて教室で読書をする生徒が増えた。/学級文庫が活用されている。」「読書の習慣がついてきたように思う。」と、普段の生活から読書に取り組む生徒の姿勢を見ることが出来る。また、読書を通じて、「普段なら読まないようないろいろな本を読むことができ、世界が広がった。/新しい発見があった。/趣味が広がった。」「長い物語を読み終えることで達成感を味わうことができた。」「想像力がついた。」など、「生涯学習」や「生きる力」につながりをみせるような意見も目立った。

「集中力がついてきたような気がする。(45分も本を読めるようになった)」という

意見も多く見られた。教師の側からは「45分の読書をする集中力が中学生にあるのか。」と心配する声が挙がっていたのだが、生徒たちは予想以上に読書に集中していた。「自分で興味のある本を選んで読むことができた。」という意見が多かったことと関係があるかもしれない。45分という長い読書時間を充実したものとするために、学級文庫に置く本の種類の指導や、読書新聞の発行(2学年)、国語の授業でおすすめの一冊を紹介する(1年)などの工夫をした。

読書の時間が学習面に反映されたと思われる意見では、「漢字が読めるようになった。」「歴史をおもしろいと思うようになったので社会をがんばりたい。」「よく辞書を使うようになった。」「読むのが速くなった。」「国語の点数が上がった。」「読む力がついたように思う。」などがあった。特に「漢字への苦手意識が薄れた。」という意見が多かった。上記の「集中力がついてきた。」という意見も学習面に大きく関係するだろう。「読書の時間が1時間目に実施された日は、その1日落ち着いた生活を送ることができた。」という教師からの意見も目立った。今年度は読書の時間を実施し始めたばかりなので学習への顕著な影響を挙げることは難しいが、今年度の反省を生かし来年度以降の取り組みに工夫を凝らしたい。

読書の時間は給食後の5時間目に実施しているため、眠気に勝てない生徒が一部出てきた。このことから生徒からも教師からも、実施する時間帯の改善を求める多くの意見が出された。「一時間目にしてほしい。」とか、「短時間でもいいので毎日読書に取り組みようにしてほしい。」などである。

今後の課題としては、教師側からのお薦めの本の提案・読書指導の活発化 実施する時間帯の検討(週1時間か毎日か) 学級文庫の充実の3点が挙げられる。より意味のある読書の時間にしていくために、今年度の反省を生かして来年度の読書の時間の実施に望みたい。

#### (5) 3年生の取り組みについて

3年生では、個々の生徒の関心・意欲を大切にしたい選択学習のあり方の研究を進めてきた。週4時間の選択学習の時間のうち2時間を1セットとし生徒が選択している。コースは、国語、数学、社会、理科、英語の5教科を、基礎と標準の組み合わせで9コース設定している。たとえば、基礎の国語と基礎の数学、また基礎の社会と標準の数学というような組み合わせで、9コースを設定している。学級をはずし、生徒は2時間枠でそれぞれの教室に移動し、2人の先生が変わって教えにくる形で実施している。自分の興味・関心、希望の進路先の高校の前期試験を視野にいれながら生徒たちに選択させた。自分の力に合わせてコースを選択し、基礎・基本を重視しながら実力をつけていった。教師の方もそれぞれのコースにあった教材を作成したり、プリントを購入したりして生徒たちの力に合わせて進めていった。また、残りの2時間の選択の時間は、課題研究的なものや、体育、音楽、技術家庭、美術などの内容から、生徒が選択し、実施している。自分の興味・関心に合わせ、決定している。第一希望がそのまま選択できるとは限らないが、できるだけ希望にそのような形をとっている。

また、10月から放課後質問教室を設けている。3年生の教員が毎日交代で、生徒たちの質問に答えている。生徒たちは、家で勉強して理解できなかったところや、授業でわからなかったところについて質問している。最初はクラスで数名だった参加者も、最近ではクラスで10名を超える生徒が参加するようになってきた。参加している生徒に感想を聞いてみると『授業と違って、先生が近くに感じられて質問がしやすい。』『ていねいに教えてくれるのでよくわかった。』『友だち同士で教え合いができるので楽しい。』ということだった。

・ 学力把握のための学校の取組について

定期的な標準学力検査の実施、今年度は、3月16日、17日に1年生と2年生で英語と数学の標準学力検査を実施する予定である。昨年度実施した結果と比較・分析をする予定である。

自己評価カードの活用

ポートフォリオの活用・研究

・ フロンティアスクールとしての成果の普及について

- ・ 指定校研究発表会を南部地区校区として、本年度、大松小学校、論田小学校で実施した。また、2月27日、京都府向日市の教育委員会、向日市の小学校の先生方が来校し、学力向上フロンティア事業についての懇談会を持つ予定である。他府県の取り組みからも学びたいと考えている。